

名著に学ぶ経営～追補

「名著に学ぶ経営」を掲載してから10年ほど経つが、その後読書はそれほど進んではいない。その中で一番読んでいるのはやはり歴史書である。今まで日本語訳や現代語訳がなかった史書が相次いで発刊されて新たに接する事が出来たのは嬉しいことであるが、中でも「後漢書」は新鮮であった。「史記」、「漢書」に続く正史であるが後漢を起こした光武帝劉秀は他の皇帝達とは異なる異色の人物である。高祖の血を引く家系とはいえ地方の一豪族の次男でありながら多くの敵を打ち破って皇帝に上り詰めた人物である。それなのに平時は非常に穏健な人物で、親類や村人にいじられながら冗談で返すといった一般人かつ現代人的感覚の持ち主である。事実合戦以外ではほとんど人を殺していない。愛妻ぶりは史実のように子供達も親思いに育った。中国では統一王朝で約100人、分裂王朝も含めれば500人に上る皇帝が存在したが、現代のリーダーとして考えればこのような人物こそ一番見習うべきである。

それから朝鮮における三国志である「三国史記」も非常に興味深かった。日本でいえば大和朝廷の時代、新羅、百済、高句麗の三国が激しく争っていた。しかも近隣の大国・強国である隋・唐や日本との外交を繰り広げながらである。中小企業が大手企業を前に駆け引きを繰り返しているようで、我々中小企業者にとっては本家中国の「三国志」以上に参考になる。皇帝といえば西洋では百数十人に上るローマ皇帝を通観できるものとして「ローマ帝国衰亡論」がある。実に1500年に渡る東西ローマ帝国の皇帝達が描かれている。18世紀英国のエドワード・ギボンの作であるが文庫本で全10冊、通読はしていないが、興味あるところをピックアップして読んでいます。

一方現代の経営者達は様変わりした。10年前は世界で名経営者と言えば真っ先に上がるのがビル・ゲイツかスティーブ・ジョブズのいずれかだったが、それに続いてGAFA、更にはMagnificentSevenとなり、何人もの桁外れのリーダーが現れとてつもない新事業を展開している。日本の方といえば、稲盛和夫が亡くなりかの京セラも普通の大企業として埋もれてしまったし、永守重信は3人でスタートした日本電産を数万人のニデックに成長させたが、不祥事により末節を汚してしまった。その2社についての本もめっきり減った。エーワン精密の梅原勝彦は上場の際の証券会社の担当者に社長の座を譲ったが、その林社長は全国の顧客を自ら回る独自の営業スタイルで、それなりに業績を維持している。本は書いていないが当社にも商談で時折来社されるので、お願いして私どもの地元の商工会で講演して頂いた。